

青年期における居場所についての研究

中藤 信哉

はじめに

本研究では、青年期における居場所についての考察を行う。居場所についての研究は近年盛んに行われているが、一方で居場所という言葉は日常語でもあり、その意味するところは曖昧で多義性に富んでいる。そこで、本研究ではまず居場所の研究を概観し、居場所という概念がこれまでの研究でどのように用いられてきたかについて整理した上で、本研究で扱う居場所の位置づけを明確にする。その上で、居場所の基本的性質について考察し、居場所があることが青年期の心性・課題にとってどのような意味があるのかについて考察する。具体的には、青年期におけるアイデンティティの問題と、居場所の関係について検討する。

1. 居場所研究の概観と本研究における「居場所」の位置づけ

「居場所」という言葉は、もともとは不登校の子どもの問題を発端として使用されるようになり、不登校になった子どもが学校以外でどのような居場所を持ち得るかということや、あるいは学校現場においていかに子どもの居場所を確保するか、という形で検討されることが多かった(住田, 2003)。しかしながら、近年、子どもや学校現場のみならず、様々な領域において「居場所」という概念が用いられるようになってきている。例えば、青年期における居場所(高橋・米川, 2008)や、老年期における居場所の研究(高田, 2002)などがあり、子どもに限らず様々な年齢を対象として、居場所の研究が行われている。また、その研究の対象領域としても、不登校のみならず、ひきこもり者に対する支援について居場所の観点からなされた研究(忠井・本間, 2006)や、がんなどの身体疾患を抱える患者の居場所感についてなされた研究(中原, 2003)などがある。また、心理療法の、特に初期の段階を居場所の提供として捉えた研究(妙木, 2003)などもあり、「居場所」という概念が使用される領域は広がってきているように思われる。

居場所についての実証的な研究は、大別すると二つの方向性があるように思われる。第一の方向性は、居場所をある程度の実体性を持った「場所」や「空間」として捉え、その構成条件や性質について明らかにしようとするアプローチである。例えば、学校現場における居場所について、居心地の良い所、居心地の悪い所という観点からその特質について検討した渡辺・小高(2006)や、子どもの「居る場所」についての記述を試みた園田・南(2003)などが挙げられる。こうしたアプローチにおいては、多くの個人にとって居場所となるような場とは、いか

なる条件・性質を備えた場であるのかについての理解が目指されている。

もう一つの方向性としては、居場所における個人の主観的体験について理解しようとするアプローチが挙げられる。こうしたアプローチでは、個人にとってその場が居場所であると感じられる際に、個人がどのような感覚を抱いているか、どのような体験がそこでなされているのかについての理解が目指される。この方向性を備えた研究の例としては、小・中・高校生における居場所の心理的機能を明らかにした杉本・庄司（2006b）や、思春期を対象に「こころの居場所」の概念を検討した則定（2006）が挙げられる。

上記の二つの方向性は、居場所の構成条件として住田（2003）が指摘した客観的条件と主観的条件の区別とほぼ合致する。つまり、第一の方向性である、居場所を実体性を備えた「場所」として、その性質についてアプローチする研究は、居場所についての客観的条件についての研究と言え、第二の方向性である居場所における個人の主観的体験についてのアプローチは、居場所の主観的条件についての研究と言える。

また、上述の居場所の構成条件についての研究の他に、居場所と他の心理的状态や、精神的健康との関連を分析した研究もある。こうした研究に属するものとしては、居場所とアイデンティティとの関連について分析したもの（小沢，2002; 2003; 堤，2002; 渡辺・小高，2008）や、思春期を対象に、心理的居場所感と抑うつ傾向の関連を検討した則定（2006）、中学生を対象に居場所と精神的健康との関連を検討した杉本（2010）などが挙げられる。

一方で、心理臨床領域においては、居場所という観点からクライアントや心理療法過程の理解を試みる研究がある。廣井（2000）は、青年期とのクライアントとの心理療法過程において、クライアントを「居場所がない」という視点から理解し、治療的にかかわることを試みている。田村（1996）や岡田（1998）においても、同様に、クライアントを「居場所がない」という視点から捉え、事例理解を試みている。また、妙木（2003）は、心理療法の場を訪れるクライアントを、心の居場所をなくしている状態として捉え、心理療法過程について、居場所を提供するという観点から考察している。その他にも、居場所の提供という観点から心理療法過程について考察したものとして、村瀬ら（2000）や富永・北山（2003）の研究がある。クライアントを「居場所がない」状態として捉えるとき、「居場所がない」状態とはクライアントにとっていかなる状態であるのかについて理解を試みることとなり、必然的に居場所の主観的条件にアプローチするものと関連することとなる。一方で、心理療法過程が居場所の提供という性質を帯びると捉えるとき、居場所の客観的条件を志向するものとなろう。

このように居場所については様々な観点から研究がなされている一方で、居場所という概念について一定の定義があるわけではなく、扱われている居場所の種類も様々である。したがって、居場所について論じる際、どのような居場所について扱うのかを明確にしておくことが必要だと思われる。杉本・庄司（2006a）は、個人が持つ複数の居場所を包括的に捉える視点の必要性を指摘し、「居場所環境」という概念を導入している。具体的には、「自分ひとりの居場所」、「家族といる居場所」、「友だちのいる居場所」、「家族・友達以外の人がいる居場所」の4種類を挙げている。これらはいわば、誰といる居場所かという客観的な構造による分類であると言えよう。一方で、藤竹（2000）は自分の能力や資質を社会的に発揮することができる「社会的居場所」、安心してほっとすることができ、自分が自分であることを取り戻すことのできる

「人間的居場所」、群集の中で匿名的な状況になることで、自分を取り戻すことのできる「匿名的居場所」の3種類を挙げている。また安齋（2003）は、自己発揮する場としての居場所と、逃げ場としての居場所の2種類を挙げている。こうした藤竹（2000）や安齋（2003）の分類は、個人にとっての居場所の心理的意味による分類と言える。

上記を踏まえた上で、本研究で論じる「居場所」について、その位置づけを明確にしておく。本研究で扱う「居場所」は、他者との関係において形成される居場所を想定している。また、居場所の客観的条件と主観的条件の区別については、特に、居場所の主観的条件、すなわち、居場所があることが個人にとってどのような意味を持つかという、居場所における個人の体験内容に焦点を当て論じていく。

2. 青年期における居場所を論じる意味

本論は青年期における居場所について述べるものであるが、青年期における居場所を論じる意義はいかなるものかについて明確にする必要がある。

一つには、青年期が移行の時期であることが挙げられる。北山（1993）は「青年期とは甚だ社会的な要素の多い移行の時期、期間」であると述べており、特に急激な移行が個人においてなされるときには、居場所が失われやすいと述べている。富永・北山（2003）においても、青年期においては他者からの自己の分立が重要になるが故に居場所の持ちづらさがあり、だからこそ居場所が保障されることが重要であることが指摘されている。このように、青年期は思春期から成人への移行の段階であり、個人にとって、これまで生きてきた過去と、これから生きようとする将来が、特に社会的な要素を伴って交錯し、ときに自己の混乱をきたすような危険を孕んだ段階である。このような移行の段階にあっては、個人のその過程を支える拠り所としての居場所の存在は重要であると言える。

青年期における居場所について論じることのより積極的な意味としては、居場所においてなされる作業が、自己形成の側面をもつことが挙げられる。住田（2003）は、共感的な他者との関係を通して個人が自己概念を再確認できることが居場所において重要であると述べている。また中原（2003）は、がんなど身体疾患を抱え、自己像に葛藤が生じた人が、自己を立て直し、自己確認の作業をしていく際に、居場所感が重要な要素であることを指摘している。このように、居場所の性質として、自己の形成にかかわることが挙げられる。

一方、自己形成の作業は、青年期において重要な課題であるとされる（溝上、2008）。青年期においては特に、アイデンティティの確立が、自己形成にとって重要な位置を占める。Erikson（1959）は、青年期において「それ以前に頼っていた不変性と連続性のすべてが再び問題になる」時期とし、この時期において達成されるべき課題を、アイデンティティの確立とした。こうしてみると、居場所における自己形成的なはたらきが、青年期においては特にアイデンティティの形成と関連することが予測される。

居場所とアイデンティティの関連を指摘したものとしては、小沢（2002；2003）が挙げられる。小沢は、実存的視点からアイデンティティを捉えたとき、居場所があるということとアイデンティティが形成されていることは密接に関連していると述べている。堤（2002）は、居

所がない感覚とアイデンティティの混乱の度合いとの関連を検討し、居場所がないという感覚の中核には自我同一性の混乱があると述べている。杉本・庄司（2006a）も大学生の居場所環境の有無と自我同一性の関連について実証的に検討し、どのような居場所環境を持つかが、アイデンティティの諸側面の確立度と関連していると述べている。また、高橋・米川（2008）においても、アイデンティティの確立度と居場所感覚の関連を実証的に検討し、居場所がない状態がアイデンティティの確立度が低い状態を反映していることが示されている。

このように、居場所があることとアイデンティティの確立との関連を指摘した研究はいくつかあるが、居場所があるということが、いかにしてアイデンティティの形成と関連しているのかは、明確にされているとはいいがたい。そこで、以下では主に理論的な観点から、居場所があることとアイデンティティの形成がどのように関連しているのかについて考察する。具体的には、居場所における自己形成の性質を検討し、そうした性質がアイデンティティの形成とどのように関連するのかについて検討する。

3. 居場所と自己の問題

（1）居場所における「いること」の保障

本節では、居場所における自己形成がどのような性質を帯びているのかについて検討する。

居場所について、これまでなされてきた定義で、特に自己についての記述がなされているものをみると、住田（2003）は、居場所を「自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心して居られるところ」と記述している。さらに、北山（1993）は、居場所を「自分が自分であるための環境」とし、村瀬ら（2000）は「心の拠り所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー」としている。これらの知見に共通しているのは、居場所を、個人が「ありのまま」、「自分らしく」居ることができる場所であるとしていることである。すなわち、居場所において、個人の主観的条件に焦点を当てるならば、その場に居る個人が「ありのままに」、「自分らしく」その場に居られるということが、居場所の重要な条件となっている。このように、居場所において個人の側に問題となるのは、他者と織り成される空間において、自分らしい自分で居られるかどうかという、自己と他者の関係の問題であると言える。

居場所において問題となるのが自己と他者の関係の問題であるとしても、そうした自己と他者の問題をあくまで「居場所」という視点からとらえることにはどのような意義があるのだろうか。居場所というのは場所・空間であり、個人にとっての環境である。したがって、居場所という視点から自己と他者の問題をとらえるとき、必然的に場所や空間という要素が含まれることになる。そうした場所・環境という要素を加味した上で自己と他者の問題を捉えていくことにはどのような意味があるのか。この点を明らかにすることで、居場所における自己形成の性質が明らかになると思われる。

場所・空間という要素を内包した居場所という視点から自己と他者の問題を捉える理由の一つには、人と人のかかわりは、場所や空間抜きにはなされないという事実がある。住田（2003）

は「居場所」を規定する第1の条件が、そこにおいて形成される安定的な他者との共感的関係であるとしても、その実際の関係は一定の物理空間において営まれる。…だから、そうした安定的な他者との関係が形成されている一定の物理的空間が居場所となるのである」と述べている。クライアントとセラピストの二者関係が重視される心理臨床領域においても、臨床実践は面接室という一定の物理的空間が重要な役割を果たす。人と人のかかわりは、それが焦点化されるにしろされないにしろ、ある場所においてなされているのである。人と人のかかわりが、場所においてなされるという事実を考慮すれば、場所という要素が内包される居場所という視点から自己と他者の問題をとらえることには必然性がある。

しかし、その点を指摘しただけでは十分ではない。居場所という場所・空間を含んだ視点から、自己と他者の問題をとらえたとき、新たに浮かび上がってくる側面はいかなるものであろうか。そうした点についても考察する必要がある。

Winnicott (1987) は、個人が何かしたりすることに優先して、まず「いること being」が保障されることが重要であると述べている。北山 (2003) も、「対象としての母親」とは対比的に「環境としての母親」の役割を強調する場合、その眼目は居場所の提供にあり、これにより「存在の連続性 continuity of being」あるいは「いること」が幼児に保障され、自己統合、心身統合、自己確立の基盤となる」と述べている。やまだ (2003) が身体動作から「いること being」について考察しているように、「いること」は身体と密接に関係している。身体とは物理的・空間的な自己であると言える。個人が「いること」を考えたとき、身体性・空間性を具えた自己として場所に存在するという視点を抜きにして考えることはできない。場所・空間という要素が内包される居場所という視点から自己と他者の問題をとらえるとき、身体性を具えた自己として個人を捉えることとなり、「いること」を扱うことが可能になる。居場所は「抱える環境」とも表現されるが (北山, 2003)、ここでいう「抱える」とはもともと母親が幼児を抱くことを意味しており、まさに幼児の身体を抱えることで、幼児の「いること」を保障するのである。したがって、居場所は、身体までを含めた全体としての自己を抱える環境であり、その眼目は、「いること」、存在の実感を個人に保障することと考えられる。このような、身体性まで含めた個人の全体としての存在の実感をその視野に含むことが、自己と他者の問題を居場所という視点から考えることの意義であると言える¹⁾。

そして、居場所が継続的にあることで、個人にとって、自分の存在を連続した形で実感することを保障すると考えられる。つまり、継続的な居場所があることで個人は自分の存在の連続性を実感することができるのだと考えられる。

(2) 「自分らしい自分」・「本当の自分」の問題

先に、居場所においては個人が「ありのまま」、「自分らしい自分」として居られることが重要だとされていることを述べた。このような「ありのまま」の「自分らしい自分」とはいかなるものであろうか。

北山 (1993) は、「本当の自分」とは「あるがままの自分」「素顔の自分」を意味しやす」と述べている。これを考慮すれば、先に挙げた「ありのままの自分」や「自分らしい自分」は「本当の自分」であると解して差し支えないだろう。このような「本当の自分」は、「のび

のびした自分」「元気な自分」が想起されやすいが、「死んだ自分」「傷ついた自分」「バラバラ」が「本当の自分」であることもある（北山, 1993）。つまり、「ありのまま」、「自分らしい自分」とは、のびのびしていたり、元気だというようなポジティブなものであるとは限らず、傷ついている自分である可能性がある。したがって、居場所において「ありのまま」、「自分らしい自分」で居ることができたからといって、必ずしもそれが居場所における自己形成の終着点となるのではない。

Winnicott (1987) は「すること」に先立って「いること」が保障されていることが必要だと述べ、富永 (2006) は「主体が機能し、何かをするためには、それ以前にまず、主体が安定して「いる」ことが達成されていなければならない」と述べている。居場所において「本当の自分」が「いること」が保証された上で、「すること」が可能になると考えれば、「自分らしい自分」、「本当の自分」とは、行為主体である〈私〉としての側面が重要であることがうかがえる。「自分らしい自分」、「本当の自分」は、必ずしもポジティブな性質のものとは限らないが、そうした「自分」として居ることが受容されることで、主体としての〈私〉の感覚を個人が実感していくという可能性が考えられる。

したがって、居場所においてなされる自己形成作業の性質としては、他者との共感的な関係を通して、受容され、肯定されることで「本当の自分」としていることが保証され、主体である〈私〉が存在しているという実感を個人が得ていくことが考えられよう。そして、居場所が連続的・継続的に確保されることにより、いることの連続性が保証され、自分が連続性をもったものとして存在することが実感されるようになると考えられる。

4. アイデンティティの感覚と居場所があることとの関連

前節では、居場所における自己形成の性質が、自分が連続して存在するという実感を、他者からの受容や肯定を通して個人が得ていくことにあり、そのような「自分」は、主体としての側面に重点があることを述べた。本節では、そのような居場所における自己形成が、アイデンティティの感覚とどのように関係するのかについて考察する。

アイデンティティについて、Erikson (1959) は、「自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信」であり、「その主観的側面からみると、自我同一性とは、自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己が持つ意味の同一と連続性を保証するという働きをしているという事実の自覚である」としている。また、「自我同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的意味での個人の自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに合致する経験からうまれた自信のことである」と述べている。このことから、アイデンティティの感覚を支えるものとして、自分自身が連続してあることと、自身と他者から見られる自己とが一致していることがあることが分かる。谷 (2001) は、Erikson のアイデンティティについての記述を分類し、アイデンティティの主観的感覚として、「自己連続性・斉一性」・「対他的同一性」・「対自的同一性」・「心理社会的同一性」の4側面を挙げている。この4つの側面は、それぞれ「自分が自分であるという一貫性を持っており、時

間的連続性を持っているという感覚」・「他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚」・「自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚」・「現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚」を意味する（谷，2001）。以下では、こうしたアイデンティティの感覚の諸側面と、個人にとって居場所があることとの関係を見ていく。

居場所においては、自分が「自分らしい自分」として連続して存在することが個人に実感されることは先に述べた。この実感は、アイデンティティにおける「自己連続性・斉一性」の感覚とほぼ対応すると考えられる。また、そのような「自分らしい自分」でいることが、居場所における他者との関係において、受容され、肯定されているという実感は、アイデンティティにおける「対他的同一性」の感覚と重なりと考えられる。

それでは、「対自的同一性」と居場所があることとの関連についてはどうであろうか。「対自的同一性」とは「自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚」（谷，2001）である。本間（2006）は、自己愛の修復という観点から不登校者やひきこもり者の居場所について論じる中で、「存在がまるごと認められ自己愛の高まりを感じるようになった不登校者やひきこもり者の心に、行為や活動への意欲が芽生えてくる」と述べている。つまり、「いること」が保障され、自分が存在することを実感できるようになると、何かを「すること」への意欲が高まってくるのである。そのようにして行為や活動への意欲が高まり、実際に自分が意欲を注ぐことのできる具体的な活動や課題が見つけれられた時、“自分が目指すこと、望むことはこうである”という「対自的同一性」の感覚が個人に実感されていくと考えられる。「すること」への意欲を実際に注ぐ具体的な活動や課題を見つけるという作業が必要となる点で、居場所があることがそのまま「対自的同一性」の感覚につながるわけではないが、個人にとって居場所があることは、アイデンティティの一つの側面である「対自的同一性」を形成する上での基盤となりうると考えられる。

次に、「心理社会的同一性」の感覚と、居場所があることとの関連について検討する。「心理社会的同一性」は、現実社会においても、自分は役割があり、なおかつ自分としてやっていくことができるという感覚を指す。つまり、「心理社会的同一性」においては個人と現実社会との関係が問われるのである。したがって、居場所があることと「心理社会的同一性」ととの関係を考慮するとき、居場所と現実社会との関係に着目する必要がある。住田（2003）は子どもの居場所について論じる中で、「子どもの「居場所」の神髄は、学校の文脈を離れたところにあって、学校価値に否定的あるいは対立的な意味合いを含んでいる」と述べている。居場所の本質的な性質として、いわゆる現実社会において適応に困難を抱えた者が避難する場という性質や、例えば学校といった現実社会への対立的な性質があることがわかる。また廣井（2000）は、「自己の統合について不安や混乱が見られる段階では、何者かに定めることを目標において関わるのではなく、まず面接者がクライアントの「居場所がない」不安を扱うことが、クライアントに安心感を与え、適切な関わり方を可能にするのではないだろうか」と述べ、「客観的な事例理解としてはアイデンティティに混乱があると判断した場合においても、治療的かわわりを考えるうえでは「居場所がない」という理解に置き換えて関わったほうが面接が自然に進む場合が多いのではないか」と述べている。これは、自己の統合についての不安や混乱を抱えるクラ

イベントとのかかわりにおいて、アイデンティティの心理社会的側面における達成、つまり、社会的な次元において「何者か」として自分を位置づけることを目標とするのではなく、まずは居場所がないという問題を扱うことの重要性を説いたものである。先に述べたように、居場所においては他者とのかかわりを通して、ありのままの自分が存在すること、「いること」が保障され、個人に実感されていく。そのような実感が個人に抱かれないうちは、アイデンティティ形成における、とくに「心理社会的同一性」の課題に取り組むことは難しい可能性がある²⁾。アイデンティティの形成、特に「心理社会的同一性」の形成においては、個人と社会との適応的な関係が重要な意味を持つが、居場所においては、そうした個人と社会との適応的な関係の形成は必ずしも優先されない場合があると考えられる。

もっとも、「心理社会的同一性」と居場所があることとの関係は、居場所をどのようなものとして捉えるかによって異なってくる。居場所には、上述したような、社会生活への適応に困難を抱える人に対して確保されるような「逃げ場としての居場所」(安齋, 2003)の他に、個人が自分の能力や資質を社会に発揮できる「社会的居場所」(藤竹, 2000)もある。そのような社会的な居場所においては、むしろ「心理社会的同一性」の感覚が、個人に強く意識されることになろう。つまり、「居場所」が多義性に富む以上、今議論している「居場所」がどういった性質のものなのかを明確にする必要があり、また、そこに居る個人がその場所を主観的にどう捉えているかを考慮することが必要である³⁾。

5. 現代青年のアイデンティティ形成過程と居場所

本節では、やや展望的な形となるが、現代青年のアイデンティティ形成のあり方と、居場所があることとの関連について述べる。

溝上(2008)は現代青年のアイデンティティ形成の特徴として、生活・人生に関わる場が多領域化しており、それに伴いアイデンティティ形成の領域が多領域化していることを挙げている。そして、そのような現代におけるアイデンティティの形成について、「ポストモダンのアイデンティティは、二重プロセスで形成されることにその特徴を持っていると考えられる。…第一のプロセスは特定領域における自己定義の形成であり、第二のプロセスはその特定の自己定義間の葛藤・調整という意味での統合形成である」と述べている。すなわち、現代の青年は、多領域にまたがって生活をしており、それぞれの場でアイデンティティを形成していく。そして、それらの領域における自己を統合していくプロセスが必要となっているのである。

これを踏まえたとき、居場所もそれら多くの生活領域のうちの一つであると言えることができる。そして、居場所において形成された自己は、その他の領域における自己との統合がなされる必要があると考えられる。居場所における自己が「本当の自己」と感じられるものとしても、それだけで良しとし、その他の領域における自己を「これは自分ではない」と排除するのではなく、その他の領域における自己と居場所における自己を、個人が自身の中でどのようにつなげ、統合していくかという点まで考慮する必要がある。

「本当の自分」のイメージと「本当の自分ではないような自分」のイメージの関係性について検討している高木(2002;2006;2008)は、「本当の自分ではないような自分」を、本当の自分

ではないが、かと言って“これは自分ではない”と退けられることもない「中間的な存在」であるとし、そのような中間的な存在を自分の中で抱えておくことで、自分の中に様々な自分同士の力動的な関係性が生まれるとしている。高木（2008）はまた、「自分でありながら自分ではないという中間的な存在は、ある種危険なものでもあり、それを抱えておけるだけの力が必要とされる一方、その存在を抱えておくこと自体が重要な意義を持つ」と述べている。居場所において個人が自分として「いること」が保障されることによって得られた存在の連続性の実感、個人の自我の力として、居場所以外の領域における自己を中間的な存在として抱えておくことを可能にするように思われる。こうしたことを考慮すれば、居場所における自分と、その他の領域における自分とをどのように関係づけ、統合していくかという視点を持つことが、居場所があることとアイデンティティの形成過程の関連を検討する上で重要になると考えられる。

6. 本研究の意義と限界

本研究の意義としては、居場所の自己形成的な性質について考察し、アイデンティティの諸感覚との関連について比較・検討することで、これまであまり明確にはされてこなかった、居場所があることとアイデンティティ形成との関連について考察した点にある。居場所においては、共感的・受容的な他者とのかかわりを通して、個人が自分の存在の連続性を実感することが重要な側面であると考えられ、そうした側面は、アイデンティティの感覚の、特に「自己斉一性・連続性」・「対他的同一性」と関連が深いものであることを明らかにした。また、居場所において「いること」が保障され、行為や活動という「すること」への意欲が高まってくることは、「対自的同一性」の感覚が個人に芽生えることへとつながっていくものだと考えられた。一方で、居場所が現実社会において適応に困難を抱える人が避難するところという性質を帯びていることから、アイデンティティ感覚の一側面である「心理社会的同一性」については、必ずしもその形成が優先されないことを指摘した。

本研究の限界としては、特に他者と織りなされる居場所を想定して論じたため、自分一人である居場所があることと、アイデンティティとの関連については論じることができなかったことが挙げられる。自室など一人になれる場所は、「人間的居場所」(藤竹, 2000)として、個人にとって自分自身であることを取り戻す機能を持つと考えられる。杉本・庄司（2006a）は、大学生においては中学生の時期に比べ、自分一人の居場所が増え、他者と織りなされる居場所の他にも自分一人の居場所を持っていることがアイデンティティの確立と関連していることを指摘している。一方で、住田（2003）が、他者と孤立した自分一人の居場所しか持たない場合、ひきこもりなどの病理に発展していく可能性を指摘していることを考慮すれば、自分一人の居場所の意味合いは、他者と居る居場所との関係において捉えていかねばならないと考えられる。そうした自分一人の居場所が、個人にとってどのような意味合いを持ち、そこでの体験内容がアイデンティティの形成とどのように関連しているのかについても、今後明らかにする必要がある。

また、本研究においてはアイデンティティとの関連を検討する上で、居場所の自己形成的な性質について考察し、アイデンティティ諸感覚と比較し、その関連をみていくという手順を踏

んだが、両者が比較しうるような概念であるかについては、検討の余地が残る。しかし一方で、居場所とアイデンティティはそれぞれ異なる理論・現象を背景として提出された概念であり、必然的に、両概念にはニュアンスや強調点の差異があるとも考えられる。今後そのような点について検討しながら、居場所とアイデンティティの関係を見ていく必要がある。

また、アイデンティティの感覚と居場所の関連について述べる一方で、アイデンティティの形成プロセスに居場所がどう関わるかという点については十分に論じることができなかった。この点について明らかにしていくためには、個人にとってある場所が居場所として感じられるようになっていく過程と、アイデンティティの形成過程との関連について実証的に検討することが必要になると思われる。これについては、今後の課題としたい。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただきました京都大学教育学研究科桑原知子教授に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 本間（2006）も、自己愛の修復という観点から、「存在自体の価値がまるごと認められることが居場所づくりの根本になければならない」と述べ、やはり居場所における自己の存在感の重要性を説いている。
- 2) 本間（2006）が、「居場所の中で「対等な他者」を発見することは、彼らにもう一度居場所の外に居る社会的な他者との関係の再構築に向かう意欲と勇気を与える」と述べているように、個人にとって居場所があることは、単純に心理社会的同一性の感覚の形成を意味するものではないが、心理社会的同一性の形成につながるはたらきがあると言える。
- 3) アイデンティティの感覚的側面と、居場所において個人が抱くことのできる実感について論じたが、アイデンティティに関しては、感覚的側面だけでなく、その形成過程もまた重要である。アイデンティティの形成過程では同一化が重要な意味を持つが、居場所についての議論では、必ずしも同一化は重視されない。しかしながら、これまで論じて来られなかっただけで、居場所においても、そこにおける他者との間で、同一化が生じている可能性は十分にある。居場所における同一化については、今後の検討課題としたい。

引用文献

- 安齋智子（2003）：「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37
- Erikson, E. H. (1959): Psychological issues Identity and The life cycle (小此木啓吾編訳 (1973): 「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 藤竹暁（2000）：居場所を考える（藤竹暁編 現代のエスプリ別冊 現代人の居場所）至文堂 47-57
- 廣井いずみ（2000）：「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究 18, (2), 129-138
- 本間友巳（2006）：居場所とは何か——不登校・ひきこもり支援への視座——（忠井俊明・本間友巳編（2006）：不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房）
- 北山修（1993）：自分と居場所 岩崎学術出版社
- 北山修（2003）：自分の居場所—精神分析理論と臨床—（住田正樹・南博文編（2003）：子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）
- 溝上慎一（2008）：自己形成の心理学 他者の森をかけ抜けて自己になる 世界思想社
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文（2000）：居場

- 所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究, 18, 3, 221-232
- 妙木浩之 (2003): 「心の居場所」の見つけ方 面接室で精神療法家がおこなうこと 講談社
- 中原陸美 (2003): 病体と居場所感——脳卒中・がんを抱える人を中心に 創元社
- 則定百合子 (2005): 思春期における「こころの居場所」に関する研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 13(2), 105-115
- 則定百合子 (2006): 思春期の心理的居場所感と抑うつ傾向との関連 神戸大学発達科学部研究紀要, 14(1), 9-13
- 岡田光夫 (1998): 居場所がないと訴える中年男性との精神療法——幻の At Home を求めて——精神分析研究, 42, 5, 602-607
- 小沢一仁 (2002): 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工芸大学工学部紀要・人文・社会編 25, 30-40
- 小沢一仁 (2003): 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工芸大学工学部紀要・人文・社会編 26(2), 64-75
- 園田美保・南博文 (2003): 「場所」としての居場所の記述的分析 (住田正樹・南博文編 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会)
- 杉本希映 (2010): 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討 湘北紀要, 31, 49-62
- 杉本希映・庄司一子 (2006a): 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連—現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として— 筑波教育学研究, 4, 83-101
- 杉本希映・庄司一子 (2006b): 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299
- 杉本希映・庄司一子 (2007): 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40, 81-91
- 住田正樹 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界 (住田正樹・南博文編 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.3-17)
- 忠井俊明・本間友巳編 (2006): 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房
- 高田清太郎 (2002): 老人の居場所——居場所探し 老人問題研究, 23, 23-37
- 高木綾 (2002): 青年期における異なる自己像とその関係性イメージについて - いわゆる「本当の自分」と「借り物の自分」の視点から - 心理臨床学研究, 20, 488-500
- 高木綾 (2006): 青年期における異なる自己像の関係性イメージについて 箱庭と円を用いた描画法を通して 心理臨床学研究, 24, 408-418
- 高木綾 (2008): 「自分と思えないもの」との関わりについての一考察—心理臨床的な視点を踏まえて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 478-489
- 高橋晶子・米川勉 (2008): 青年期における「居場所」の研究 福岡女学院大学大学院紀要: 臨床心理学 5, 57-66
- 田村絹代 (1996): 居場所を求めて転々とした後、母親と同一の所属を選択した同一性拡散の症例——その病理と治療関係について—— 精神分析研究, 40, 3, 228-233
- 谷冬彦 (2001): 青年期における同一性感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273
- 富永幹人 (2006): 居場所: 妙木浩之編 (2006): 日常臨床語辞典 誠信書房
- 富永幹人・北山修 (2003): 青年期と「居場所」 (住田正樹・南博文編 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会)
- 堤雅雄 (2002): 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要, 人文・社会科学, 36, 1-7
- 渡辺弥生・小高佐友里 (2006): 高校生における「居場所」としての学校の認知について 法政大学文学部紀要, 53, 1-15
- Winnicott, D. W. (1987): Babies and their mothers (成田善弘・根本真弓訳 (1993): 赤ん坊と母親 岩崎学術出版社)

やまだようこ (2003) : 場所に居ることの身体イメージ—天地のあいだと「立つ」「坐る」「寝る」
図像— : 南博文・住田正樹編 (2003) : 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大
学出版会

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

A Study on “*Ibasho*” (Existential Place) in Adolescents.

NAKAFUJI Shinya

The present study aims to examine the function of “*ibasho*” (existential place) for adolescents and considers of the relation between that and an important task during adolescence: “Identity Formation.” In “*ibasho*,” it is considered that an individual's feeling of “continuity of being” gained through empathy from others is the important aspect of self formation, deeply related with “a sense of identity,” especially “self-sameness, continuity” and “interpersonal identity.” Moreover, from the viewpoint of a repair of narcissism, it could be considered that an increase of motivation toward activities connects with a sense of “self- identity.” Whereas because “*ibasho*” has the characteristic to be a shelter for those who have failed to adapt to sociability, the formation of “psychosocial identity” included in “a sense of identity” is not necessarily preceded. In conclusion, future research topics are presented.